

広報

ものべり川

MONOBEGAWA

平成26年度号



物部川漁業協同組合

山の崩壊

特集

天然アユに
こだわりたい！



下流の工事

上流の増水

町田堰のアユ

物部川劇場・天然アユにこだわり

物部川では平成23年度より、杉田ダムより下流において、全量天然アユで対応をしてきました。以来4シーズンが終わり、その4年間の実績を検証しました。

物部川と言うと、全長80キロ足らずの急流河川であり、そんな川に大きなダムが3つと、発電用や灌漑用の堰がいくつもあります。度々新聞にも取り上げられますが、長期的に濁水の続く川です。「山にシカが増え過ぎて、そのシカが山の草木を食い荒らし、山の崩壊へとつながり、濁水を招いている…」、まるでシカばかりが悪いようにも書いてあります。しかし、シカだけの問題ではないのです。温暖化

に起因する気候変動により、記録的な降雨が日常化していることも濁水の原因でもあると思っています。そんな劣悪な環境の中、さらに追い打ちをかけるように、下流部では堤防の補強工事や橋の耐震工事が進められ、上流部でも各所で災害復旧工事が行われています。そんな状況の中、「こんな時だからこそ天然アユで勝負せんといかんじゃいか！」と決断したものです。

「天然アユと放流アユの考え方」

天然アユは、その土地に生まれ、その土地に育つために、その環境に慣れているからたくましく生きられるのではないかと考えています。人間だって南の国は暑い、北の国は寒い、でもそれなりにたくましく生活しているように。それと同じではないかと考えているのです。

放流アユについては二通りのやり方があるかと思っています。一つは海産、湖産、よその河川からの調達が思いつきます。しかしそれには、その土地にいない魚を一緒



【放流】

に連れて来たり、病気の元を連れて来たりするリスクを負うことになり、どうも都合が悪いのではないかと。また、もう一つは人工産のアユです。高知県の河川では、ほとんどこの人工産を放流しています。物部川でも、杉田ダムから上流は100%この人工産を放流していますが、育ちも良く、十分機能していると思います。下流部でも平成22年度までは放流していましたが、こちらではいくつかの問題点が見受けられました。

「標識アユの行方？」

物部川下流部でも放流事業については随分以前から平成22年まで取り組んできました。それこそ海産、湖産、他の河川からの調達、人工産…と、あれこれやっていたようです。しかし冷水病に悩まされたり、外来種であるブラックバスなどが持ち込まれたり、放流の効果が掴めなかったようです。

そこで、標識アユを放流して調査をしたようですが、一雨ごとに数が減り、解禁頃には姿さえ見えなくなっていたり、追加放流して

【遡上】



【アブラビレを切っています】



もそれに見合う

程の量が確認できなかったり、そういった報告が記録として残っています。近年では平成21年度にヒレを切った標識アユを1トン約9万尾放流して追跡調査をしました。その年も何度かの増水・濁水に見舞われましたが、結果から言うと、解禁後標識アユはほとんど見られない状態で、収量全体の2〜3%位の割合でした。しかも獲れた場所は下流域に集中し、上流域ではほとんど確認されなかったのです。驚いたのは8月中旬頃に河口より1*くらのところで投網に10尾、20尾と群れで獲れた時がありました。どうやらこの頃になっても天然アユとは交わることなく群れで移動していたと思われる。また

増水などの環境変化により、一度下流へ下るともう遡上してこないのではないかと考えられます。その上、病気にも弱く、冷水病で重症化して死んでしまったり、天然アユに伝染したり厄介なものです。ちなみに平成21年3月20日時点の遡上調査では約42万尾と推計されています。こんなことから考えると、「どうも天然アユと放流アユは共存共栄できていないし、しないのではないかと推測されます。我々日本人が何の予備知識もないまま外国へ行って、すぐには現地の人たちと同じ生活ができないのと同じではないでしょうか。もちろんダム等に分断された上流部や魚道の整備されていない地区などは、県内産である人工種苗（病理検査済み）でなければならぬのはいうまでもありませんが。

「4年間の遡上は…」

平成22年の秋、河川工事に伴い産卵場は様式も場所も面積も変え対応しました。大型タンクや重機が行き交うすぐ隣の産卵場でしたが、役割を十分果たして



れました。流下仔魚は推定で1億8千万尾と算出され、3月24日の遡上調査では推定84万尾の遡上と、河口付近で無数の待機アユがいるとの報告を受けました。その年はいつもより水量もあり、平成23年度はいよいよ放流を見送ることを決断しました。

4月下旬ごろからは、河口から8*にある堰へ大群のアユが押し寄せ、無数の遡上行動を見ることができました。

5月15日の解禁日は、全量天然アユという前評判もあり、また、天気の良い日曜日で、その上当時高速道路の無料化ということも手伝って、この上ない好条件の物部川劇場の開演日となったものでした。

来場者も300人超と活気にあふれ、釣果も3桁釣った方が数名おられました。「放流しなくても大丈夫だ」と自信を持ったものでした。

平成24年、25年と河川工事は続いていましたが、流下仔魚も遡上アユも右肩上がりで推移してきました。毎年のように繰り返して増水・濁水にも見事に対応してくれ、冷水病も重症化することなく乗り切ってくれました。「さすが天然は強いなあ」と感心もしたことでした。

しかし平成25年の夏は猛暑で雨も少なく瀬切れ寸前まで干上がり、水温は上昇し、熱中症にかかり多数のアユが流れて行ったのにはまいました。いくら天然アユでも湯のような水には対応できないようです。7月中下旬には川底の様子も変わり、アユの姿も極端に減少し、「ひょっとして来年度の親アユにも事欠くんじやないか」と真剣に思ったことでした。

ところが8月中旬を過ぎた頃からどこに潜んでいたのか復活して、9月には数もサイズも申し分のない状態で、最後まで漁を楽しむことができました。

しかし平成26年については様子が一变しています。流下仔魚は例年並みの数字（約14億8千万尾）

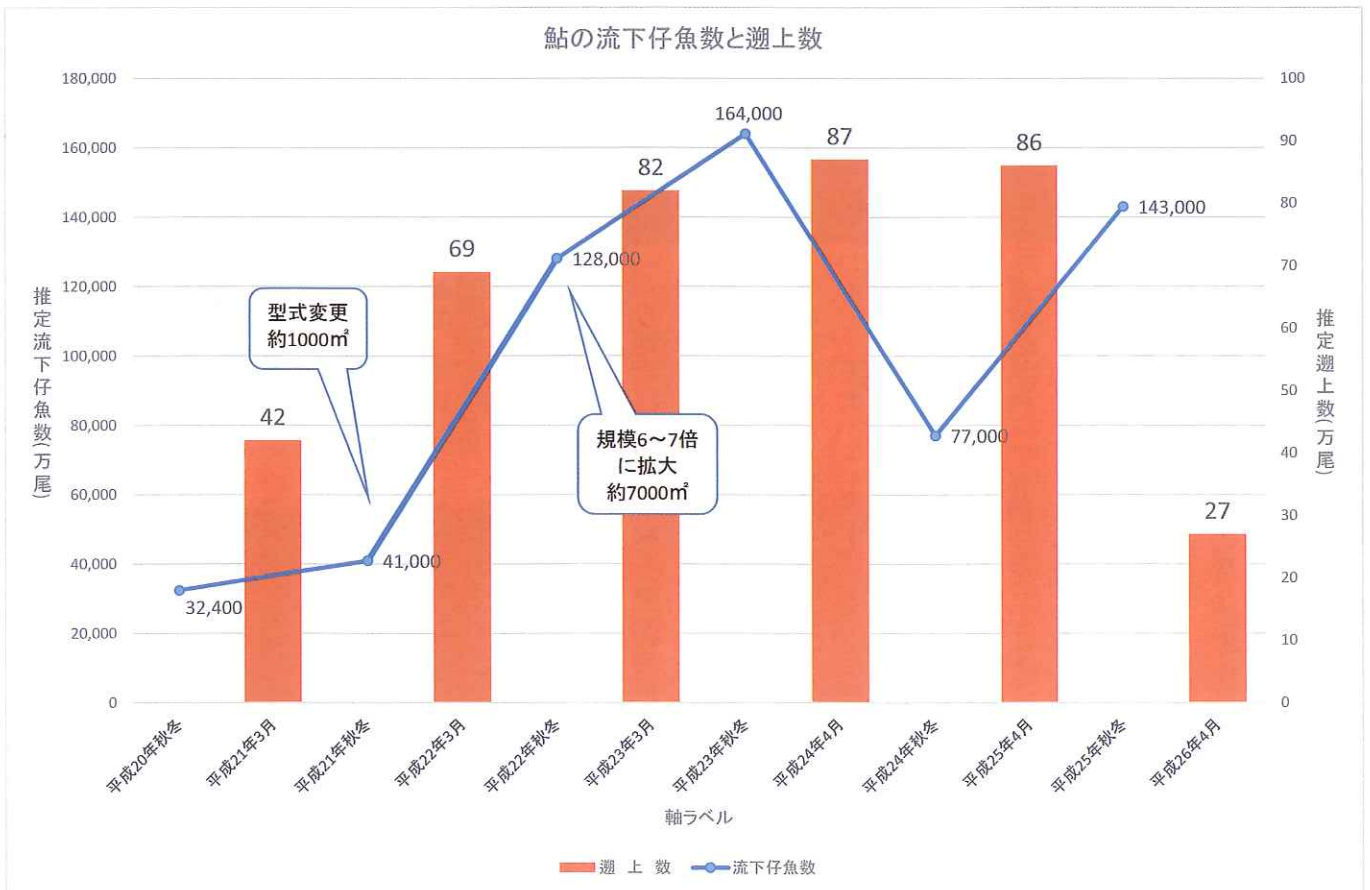
【流れてくるアユを待っているシラサギ】



【9月になり、予想を上回る釣果が！】

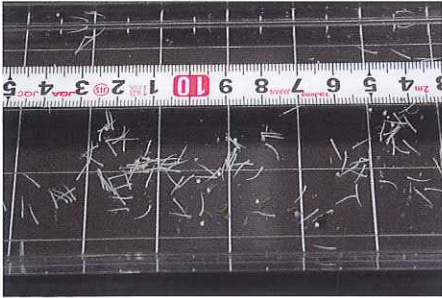
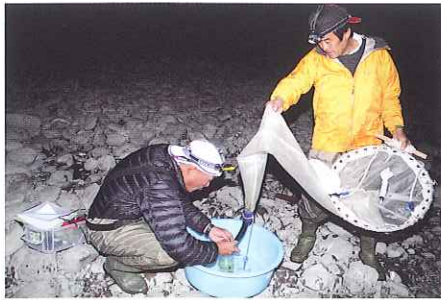


を記録していましたが、濁りのため4月に入ってから実施された遡上調査では、遡上が遅れているのか、数そのものが少ないのか、遡上数は30万尾足らずとの報告でした。解禁後も、数が少ないため、例年より成長具合は良いものの、昨年までのようにどこでも釣れるということはなく、苦戦を強いられました。「なんでこうなったのかな」と原因をあれこれ考えてみると、どうやら海の方に原因がありはしないかと思うのです。春の近海の水温が低かったようでカツオの遡上も遅れていました。どうやらそのことがアユの遡上にも影



※川の状況や水量などにより誤差があります。

【流下仔魚調査】



響を与えていたのかもしれないところ
ところが、5月も下旬から6月にかけて、再び遡上があり、川底の様子も変わってきたのです。「やはり川と海はつながっていて、影響し合っているんだな」と改めて思うことです。

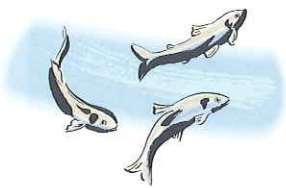
8月になると、連日の大雨や台風
風の接近で、記録的な雨量となり、川そのもの様子もがらりと変わり、流れまでもが大きく変わってしまいました。「いくら天然アユがたくましいと言ってもこれでは…」来年の親を真剣に心配してしました。しかし、そんな心配をよそに、下旬になり水量が落ち着いてくると、痩せてはいるものの、アユはちゃんと残っているんですね。さすが何千万年もの間生き残ってきただけのことはあると思います。

「産卵場について」

産卵場の造成については、川
の状況を見て早くから必要性を感じて取り組んできました。現在では、川底を重機で混ぜて洗い、湧水時の対策として飲み口をつけ、防鳥用のテグスを張る、という、ごくシンプルなものにしています。場所によっては防鳥用のテグスを張るだけ…というところもあります。それでも十分機能しています。少しでも川の流れに逆らわず、自然の状態に近い環境づくりが大切なことだと考えて取り組んでいます。

「全国湖沼河川
養殖研究会にて」

先日、全国湖沼河川養殖研究会
より依頼を受け、第87回大会にて「物部川劇場・天然アユにこだわ
り」と題した発表をさせていただきました。同大会の基調講演をされた長崎大学大学院の井口教授が、次のような発表をされました。第87回大会資料より抜粋してご紹介します。



【全国湖沼河川養殖研究会】

長崎大学大学院
水産・環境科学総合研究科

教授 井口 恵一朗

「生物多様性という考え方」

生物多様性 (biodiversity) という言葉を耳にする機会が増えた。とくに専門家でもなければ、「生きものの数や種類が多ければよいのだらう」くらいに思われるかもしれないが、実はそうではない。地域独特の環境条件を共有する生きものたちは、遺伝子のレベル、種のレベル、生態系のレベルでつながりを紡ぎながら、長い歴史を生き抜いてきた。生物多様性とは、生きものの相互の関係性の総体のことを指し、調和の取れた状態であることが肝心であると説く。今や地球上の至るところで、生きもの同士をつなぐ関係性の糸がブチブチと寸断され、生態系に備わる復元力が失われようとしている。もはや猶予はない。

「かつてどこにもあった水辺」

日本列島にモンスーンが吹いて、決まった時期にまとまった雨を運んでくる。梅雨のもたらす増水は川から田んぼに水を注ぎ、どこか懐かしい情景を醸し出してきた。森・川・海の連携は、生きものの

往来ばかりではなく、物質の移動にも重要な役割を果たしている。灌漑や築堤など、ちよつとばかり人の手は加えられていても、川の中では太古からの生き物の営みが繰り返される。森からの栄養で付着藻類は繁茂し、海から遡上してきたアユの成長を保証する。アユの食べこぼしや糞は流れくたり、やがてはシジミの餌となる。原風景のなかにある営みを再現すること、これが水辺保全の一つのモデルとなる。

「山川藪沢之利公私之を共にす」

狭い水域では漁場の独占が起こりやすく、乱獲の元凶になる。掻い掘りや毒流しが横行すれば、魚なんて瞬く間にいなくなる。共同管理による資源保護の知恵は漁業法に受け継がれ、その流れのなかで漁業権魚種には増殖の義務が課せられた。要は「獲りっぱなしはNG、後の手当もお忘れなく」という戒めである。アユでは定番の種苗放流が、一代限りの添加に尽きるという事実はほぼ間違いない。これでは、真の意味で増殖効果は期待できないばかりか、在来アユへの悪影響も懸念される。そもそも単なる数あわせでアユが増えるわけもなく、生態系全体の均衡を考慮した取り組みが優先されなけ



【オイカワ (シロハエ)】



【アユカケ】



【ボウズハゼ (ボウズゴリ)】



【ヌマチチブ (ちちこ) (ゴリ)】

ればならない。

「漁場における保全の流儀」

漁業現場の生物多様性保全といっても、アユだけの絞つて行動を起こすわけではない。アユとは無関係に見える生きものであっても、きつとどこかにアユとのつながりがあることを意識しよう。

今やるべきは、アユならびにアユと共存する生きものたちが、従来通りの関係性を維持していけるように管理の手をさしのべることである。これには、遺伝的ハザードの抑止、在来生物の生息環境の整備、回遊経路の確保などが含まれる。うわべの自然らしさを追求するのではなく、漁場に本来備わる生態系機能の回復を志向する。保全に成就すれば、地場のポテンシャルを十二分に活用した漁場経営が可能になる。

「環境収容力には 限界があります」

アユはなわばりを形成し、この習性に因って友釣りが成立する。釣獲可能な個体の多少は、アユの個体数密度と藻類生産力のバランスで決まる。アユの遡上量は、仔稚魚が海中で暮らすあいだの生残率に左右される。藻類の成長には

水温、流量、栄養塩類などが関与し、河川形態や景観の支配を受ける。だから、どんなに努力したところで、その川固有の相場を超えてまで漁獲を上積みし続けることはできない。よその爆釣情報には耳を貸さず、ほどほどの釣果をもってよしとする、これぞ釣り師の良識とはいえないか。釣らせる側と釣る側、双方の節度ある態度が漁場を変えるとすれば、ハッピーなチャレンジである。

「明るくありたい内水面の未来」

健全な漁業は、自然の余剰生産力(非利息)のうえに成り立っている。生物多様性を消耗させる漁業は、元本を取り崩しているようなもので、早晚破綻する。功利的な価値観に照らしてみれば、生物多様性を保全して得られる報酬はこのほか少なく思えるかも知れない。ただし、当たり前の生態系を実現することこそが、持続可能性を約束してくれる。現世に生きる私たちの決断一つで、未来の世代が自分たちのニーズをかなえる機会を享受できるとすれば、それはとても素晴らしいことではないか。将来を見据える立場にたてば、意思決定の重さを理解することができる。大切な地元の川を見放し



【テナガエビ】



【シマヨシノボリ (ゴリ)】



【ギギ】



【モクスガニ (つがに)】

「元気の森」整備を始めました

平成25年度に物部川上流域である香美市物部町の岡ノ内・別役地区に、山林合わせて約3・5haを購入、平成26年度に入り整備を開始して、2・07haに「ケヤキ」の苗木約2600本を購入し、植樹しました。

この漁協所有林には、水源としての機能回復や物部川の濁水の軽減、流域の人々が元気になるようにとの願いを込めて、「元気の森」と名付け、物部川漁協の環境保全のシンボルとして育てていきます。

なお、「元気の森」の名称は、多数の公募により決定致しました。



た。応募くださった皆様、ありがとうございました。

水質の改善にがんばってみました

物部川下流域である戸板島橋上流100mに土佐山田地区からの生活雑排水が流入しています。

これまで、この地区より下流側で釣れたアユは、「ドロ臭い」とか「食べられない」といった評価を受けていました。従前より行政機関への請願等を行い、下水道の接続率の向上や浄化設備の新設などの話し合いを持ってきましたが、「漁協も言うだけでは前に進めない」ということとなり、木炭を入れた浄化設備を作ってみました。

設置後、写真の堰の上、下流で水質を測定していますが、若干の改善が見られており、平成26年度の「清流めぐり利き鮎会」では準グランプリも受賞し、効果を実感しています。



第57回全国内水面漁業振興大会に参加して

平成26年10月23日、全国内水面漁業振興大会が開催されました。本大会は毎年全国各地で開催されており、昨年は富山県で行われましたが、今年は高知県内水面漁業協同組合連合会の担当で、高



知県立県民文化ホールにて行われました。1都1府38県の内水面漁業関係者約680名が出席し、当漁協からも理事、監事、参事、事務職員の11名が参加しました。初めに昨年の第56回大会での決議事項6議案に対して、各省庁との協議内容等が報告され、参加者全員の賛成により了承されました。その後、今大会で全国6ブロックから提案された6議案について討議が行われました。

議案の内容は、アユ資源や魚病、ウナギの資源管理等々、内水面漁業の重要な問題点が討議され、全国内水面漁連の役員による応答、また来賓の各省庁関係者により回答がありました。問題点は今後なお関係各省庁と対応の協議を行い、次回大会において処理内容の報告を行うこととし今回提案された6議案の賛否が提案され、参加者全員の賛成により了承されました。

次回58回大会を鳥取県内水面漁連の担当で行うことを決定し、全議案が終了。この大会に参加して各討議を聞いてみると、各関係者の熱い思いを討議の中に感じることができました。

8月の雨と物部川 今年の雨はいつたいどうしたんだ？



2710ミとなり観測史上の最高を計測しました。

この大雨により深淵の水位（平常40ミ〜70ミ）は、8月10日午前7時の367ミを最高に2日午前10時以降月末まで常時平水を超えていました。

また、釜ヶ淵観測所での濁度計測でも8月1日の2・9から一気に100を超えて10日には95・4を観測し長期間の濁水状態となりました。

こうした大増水、強烈な濁流の中におかれたアユがどうなったのか？誰もが心配して毎日川



まず、台風12号が南西諸島、沖縄から東シナ海を北上とはるか彼方を通ったにもかかわらず、高知県に経験のないほどの雨を降らせました。8月1日の降り始めからの積算雨量は県下の各地で1000ミを超え、香北町川の内川では8月2日から5日までの4日間に1616ミという記録的な雨となりました。

また、10日には強い勢力のまま安芸市付近に上陸した台風11号などにより川の内川での月間雨量は

行ったもの
を見に
行きました。水位が下
がるにつれ、川底の様子、流れが
一変していることに驚き、また、
アユの姿を確認できないことへの
不安も募らせましたが、9月にな
つての釣行で、痩せてはいるもの
の元気な姿を見せてくれ、胸をな
でおろしました。その後体型も回
復し、場所によりばらつきはある
もののあちこちでいい釣果を聞く
ことができました。全量天然アユ
で対応してきた効果ではないかと
自信を深めたものでした。



利き鮎会で『準グランプリ』

平成26年9月12日、高知市の城西館で第17回清流めぐり利き鮎会が開催されました。今夏は天候不順でアユがなかなか集まらず、開催が危ぶまれたと伺いましたが、利き鮎会当日には、全国のアユ2196匹が華やかに並べられ、その盛大な会模様我感到！また、他河川のアユをいただく機会が少ないので、その味の違いにも驚かされました。

【審査方法】

全国49河川が8グループにわけられ、一般参加者がグループ毎に審査を行います。この時点では河川名が伏せられているため、参加者も先入観は持たず審査を行うことができます。続いてそれぞれのグループで一番得点の高かった河川が決勝に進み、有識者による審査が行われます。決勝で最も高得点を得た河川がグランプリ、その他7河川が準グランプリとなります。

【結果】

平成23年度はグランプリに輝いた物部川のアユ、本年も見事決勝まで勝ち進み、準グランプリをいただくことができました。グランプリは岐阜県郡上市和良町を流れる和良川のアユで、なんと3度目

のグランプリ受賞とのことです。毎年、利き鮎会を開催して下さる高知県友釣連盟の皆様や、全国のアユを提供してくださった方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



親子さかな釣り大会に参加して

香美市教育委員会香北分室

大峯 啓之

平成26年9月23日（火・秋分の日）、物部町別府峡において、親子さかな釣り大会が開催されました。この釣り大会は、別府峡保勝会の協力の



下、香美市教育委員会及び物部川漁業協同組合が共催し、行いました。開催にあたっては、迫り来る台風の影響が心配されましたが、大会当日は何とか天候に恵まれ、参加した約40組の親子は、自然豊かな物部川での釣りを楽しみ、絆を深めました。

大会では、まず、参加者も協力してアマゴ200⁺を放流。水槽に入れて運ばれた大量のアマゴをバケツに移し換え、子どもたちとともに川へ放流しました。その後、花火を合図に釣りを開始。参加者は、それぞれ、自分が目をつけたポイントで釣りを楽しみました。最初は、なかなか釣れずに苦戦していた子どもも、やがては釣りに慣れ、みな概ね良い釣果をあげていたようです。中には50匹以上釣った家族連れもいたようです！

釣りと同時に、魚の料理体験も行われ、こちらにもたくさんの子どもたちが参加しました。慣れていない包丁の扱いに苦戦しつつも、魚の料理体験を楽しんでくれたと思います。調理した魚に舌鼓を打ち、釣りに食事に大満足な1日となりました。

釣りは、教育委員会が小学生対象に実施した各種アンケートでも、好きなイベントの上位に入る人気イベントです。この釣り大会は、昨年からは別府峡で実施され、昨年も70人近い参加者がありました。今年度については、諸事情により開催が未定となっていました。個人的に、子どもたちに人気のイベントが開催できない、というのは悲しいことと考えていましたので、今回、漁協の皆様との協力を得て開催できたことを大変うれしく思います。本当にありがとうございました。



出漁の手引きの変更箇所について

出漁の手引きが一部変更になりました。

① 友釣り、ぎじ釣り専用区（期間限定）

野市町仁尾島から下流県庁堀の上端に至る区域の友釣り・ぎじ釣り専用期間について「5月15日～8月31日まで」を「**5月15日～9月30日まで**」に変更する。

② 許可の条件

① あゆ漁業の「と網・なげ網」の杉田えん堤から下流の区域の期間について「7月1日～9月30日まで」を「**6月20日～9月30日まで**」に変更する。

② うなぎ漁業の期間について

「1月1日～12月31日まで」を「**5月1日～9月30日まで**」に変更する。

③ うなぎ漁業の方法について

「**石くろ**」は禁止とする。

③ 遊漁料金

80歳以上の者の料金について

「無料」を「**500円**」に変更する。



損益計算書 平成25年1月1日～12月31日（単位：円）

借方		貸方	
教育情報費	684,175	指導事業賦課金	1,062,000
繁殖保護費	18,545,395	受入行使料	1,088,000
漁場管理費	2,773,286	受入遊漁料	4,869,000
指導雑費	2,438,769	繰入教育情報資金	320,000
河川整備事業費	300,084	受入漁業被害補償金	31,680,000
人件費	13,426,762	指導事業雑収入	8,080,575
旅費交通費	170,509	事業外収益	120,063
業務費	1,841,993	特別利益	97,346
諸税負担金	592,184		
施設費	3,442,795		
減価償却費	574,085		
雑費	350,928		
法人税、住民税	547,100		
支出合計	45,688,065	収入合計	47,316,984

《差引残金》1,628,919円は次年度へ繰越

役員名簿 平成26年4月1日現在

役職名	氏名	
代表理事組合長	山本 幹男	
理事	専務理事	野島 昂
	理事	小松 教利
	〃	伊浦 征世
監事	〃	長野 一行
	〃	山本 学
	〃	小松 和博
代表監事	依光 正隆	
監事	監事	三谷 勝義
	〃	小松 弘明

※役員はすべて非常勤です。

組合員数

◆H25.1.1
354

◆H26.1.1
339

編集後記

今回は文字数が多い号になってしまった。さて、どれくらいの方が漁協の想いを受け取ってくれるだろうか…？

それはそれとして、アユたちは有史以来何千万年とその営みを繰り返しているのである。27年度も、下流部では全量天然アユで対応するつもりだが、我々人間の都合のよいようにはいかないのも事実である…。

平成26年12月25日発行
物部川漁業協同組合

〒782-0016 香美市土佐山田町山田1865番地
TEL 0887-53-3224
FAX 0887-52-0100
URL <http://monobegawa.sakura.ne.jp/>